

当財団の「アドミュージアム東京」資料室には、さまざまな企業PR誌が所蔵されています。
その中から優れたものを取り上げ、それがどのような企業個性を表し、時代を捉えているかを探ります。

丸善出版株式会社「學燈」1911年

最長寿を誇る現役のPR誌

「學燈」は、1897(明治30)年に「學の燈」として創刊されました。それまで丸善は、洋書・和書の目録(不定期)と、「和洋書籍及文房具時価月報」を発行していましたが、ニーズが高かったことから、月刊誌としての発刊に至りました。1903(明治36)年から「學燈」に改題し、現在発行されているPR誌として最も長い歴史を誇ります。

当時、新聞や雑誌などの活字メディアの普及によって、出版物が徐々にクラスメディア化されていきました。そこに着目した小売業が、雑誌を生活スタイルの提案だけでなく、潜在需要を掘り起こすメディアとして活用し始めました。

それらの雑誌は「広告雑誌」「機関雑誌」などと呼ばれ、当時、呉服店からの移行を図る百貨店を中心とする業界を中心に、小売企業による雑誌が登場し始めたのです。

この欄では、1911(明治44)年1月発行の「學燈」第15年第1号をご紹介します。

この年の本誌は、年間を通じて、このビーズリー調の表紙が用いられ、特に1月号は、赤色を用いて新年のおめでたい雰囲気を漂わせています。

表紙をめくると、広告のページが並びます。

まず、新刊書の広告です。一般の書店では流通しない極めて限定された領域の専門書や読本、事典などが記載されています。

続いて商品広告が並びます。タイプライター、万年筆、ペンケースなど、丸



1911年1月発行の第15年第1号ほか、同年に発行された「學燈」の表紙

善が扱う質の高い文具を中心とする商品が紹介されています。

広告ページの最後には丸善の営業案内で、事業方針が列記されています。「40年来海外書籍文房具直輸入をしており、さらに顧客のために便利な方法を計画していること。海外書籍および文房具売り捌きのほか内外学士大家の著訳書を出版また外務省その他諸官庁および帝国大学が収蔵する図書も発売すること。また他店の出版、発売の諸大家先生の著訳書や美術書類は悉く取り揃え売り捌くこと」

編集長が勧める 書籍の海の航海術

続いて、内容のページに移ります。

まず署名原稿です。巻頭の「書齋生活(承前)」は、この雑誌の編集長、内田魯庵のエッセーです。「第二 書史学」と見出しがあり、「“Bibliography”即ち書史学は書籍の品目、分類、解題、沿革、歴史等およそ書籍に関する一切の研究をいふ」という文章から始まります。

ビブリオグラフィとは何か。世界の著名な図書館が所蔵する数千万巻の書籍を渉猟するには、ビブリオグラフィが不可欠であることを雄弁に説いています。「ビブリオグラフィーは図書世界の地理書なり、案内書なり。ビブリオグラフィーに頼らずして図書世界に入らんとするは水先案内なしに海を行くと同じく……」と語ります。

そして世界のビブリオグラフィの歴史をひもときます。

「支那歴史の『芸文志』または『経籍志』は、ビブリオグラフィーの端緒を拓き、世界に誇りうるものであります。特に、宋の『郡齋讀書志』および『直齋書録解題』に到っては明らかにビブリオグラフィーの態を備えている」と記します。「我が国の藤佐世の『現在書目』はこれと比較すれば整ったものではないが、1000年(という時代)にこの書目を持ったわが文化の淵源もまた誇るべき」と著者はいいます。

また、ヨーロッパにおけるビブリオグラフィの大著として貴重なゲスネルの

おかだ よしろう●1934年東京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。56年電通入社。コーポレートアイデンティティ室長を経て電通総研常任監査役。98年退職。70年の大阪万博では、「笑いのパビリオン」を企画。80年代は電通のCIビジネスで指導的役割を果たす。著書に『社会と語る企業』（電通）『観劇のバイブル』（太陽企画出版）、詩集『散歩』（思潮社）、『世界一の映画館と日本一のフランス料理店を山形県酒田につくった男はなぜ忘れ去られたのか』（講談社）など。

『Bibliotheca Universalis』を挙げています。「1545年より55年にわたって完成し、各題目の下にヘブライ、ギリシャ、ローマの典籍をことごとく包括したので、古文学・中世文化史研究者のためには今なお貴重な宝典となっている。しかしビブリオグラフィーが盛んになったのは十九世紀以後であり、その前の著で特に貴重なものは数少ない」といいます。

このエッセーは内田魯庵の博識と、書籍へのあくなき追求心、愛情を示しています。

外国書への憧憬と 思い出をつづるエッセー

2番目のエッセー、馬場弧蝶の「読書の追憶」は、「我々が物心がつき始めてからのこの二十年以来の日本の進歩はずいぶん著しいと言わなければならぬ。中にも、予自身の第一番に明らかに感じるのは、外国書に対するわが読書界の推移である」という文章から始まります。そして、通り3丁目にある丸善書店の大きな建物は確かに日本読書界の進歩の象徴だといいます。外国書の読まれる範囲と分量が増え、丸善書店の規模が大きくなるにつれ、読者の便利が著しく増し、外注書籍がかなり早く手に入るようになったことを著者は挙げています。ここ4、5年来の日本の思想界の動揺は、外国の新しい文学に対する要求が増え、現今の文学好きな青年の読む外国文学書は比較的新しい作家、および新刊書が大部分を占めているように見受けられるといえます。

著者は、自分の読書体験として、テエヌの「英文学史」が大

いに便宜を与えてくれたことを記します。今も記憶している読書として、「バイロンの詩やバイロンに関する伝記」「シェークスピアの作品」「ゲーテの作品」などに熱中したことを臨場感豊かに書いています。それは今日のツルゲーネフ、トルストイ、モーパッサン、ゴーリキー、イブセンなどと同じくらいの重さを持っていたと回顧します。

さらに、エミール・ゾラの『ナナ』、オノレ・ド・バルザック『海辺の悲劇』『カントリー・ドクター』、アルフォンス・ドーデ『ジャック』『シドニー』『サッフォー』などに興味を持ったことを記します。自分が十分に読書ができなかったのは、外国書の種類、分量が少なかったためでもあることを理由に、今日のように古本でさいろいろな外国書が多く出る時代であったら、自分がいかに凡庸でも、もう少し読書ができたに違いない、ただ望むところは、青年の読書家諸君ができるだけ多大の外国書を読破する習慣が盛んになり、丸善書店の書籍の数が今日の数十倍となる日が一日も早く来ることを願

う、という言葉で文章は終わります。

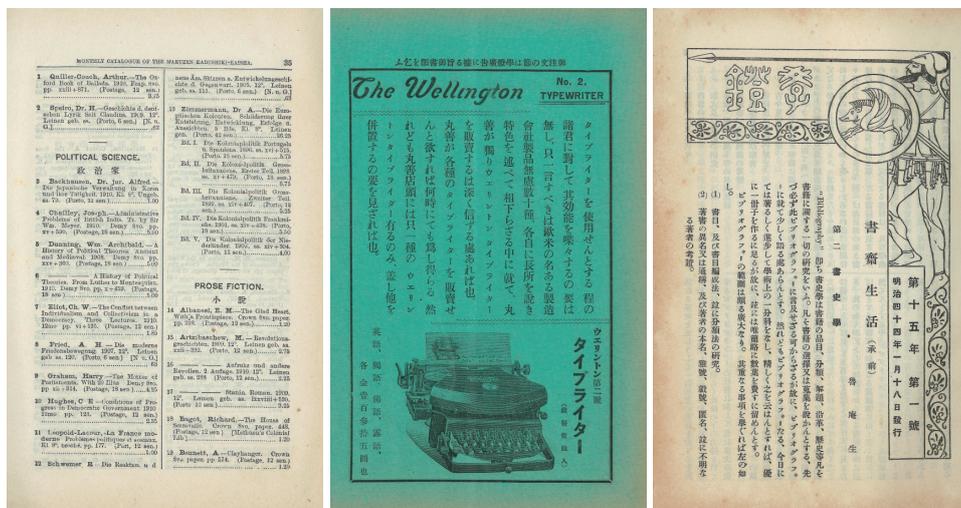
3番目のエッセー、文学士白零生の「ウィリアム・ジェームス博士及びその著書」は、世界的な心理学者、プラグマティストであった博士の逝去にあたって、その短い伝記を述べ、著書について紹介しています。

これらのエッセーからは、本誌が文学雑誌としての役割を担っていたことが伝わってきます。

巻末の39ページの「欧文月報」では、「航空術」「農業、園芸及び林学」「商業及び商業経済学」など、48項目に分けて新着洋書が紹介され、書籍に関する新しい情報がここに集約されています。

「學鏡」は1897年から今日まで120年にわたり知的好奇心に火を灯し、育てる役割を続けてきました。歴史をつくってきた丸善のフロンティア・スピリッツと、その情熱を絶やさない熱い志が伝わってきます。

*引用箇所表記は新字・現代仮名遣いに変更
*タイトルと著者名が目次と本文で異なる箇所については、目次の表記を採用しました



左：小説から政治まで幅広いテーマの外国書の新刊カタログ。中：丸善で取り扱っていた高級タイプライターの広告。右：「學鏡」編集長の内田魯庵による、ビブリオグラフィに関するエッセー「書齋生活」